

「勇気、気力、そして誇り」

行方不明者捜索 男性警察官

「いつでも東北に出動できる準備をしておくこと。」上司からの最初の指示である。

私は異動を控えており、内示が発令された翌日に震災が発生した。テレビでは未だかつて見たことのない惨状が映し出され、日を追うごとに死者、行方不明者の数が増していく。

私は管区機動隊に配置となった。「一日でも早く現地で活動がしたい。」そう思いながら資機材、食料、日用品等が満杯に積み込まれた車で走ること丸二日、今回の震災で最も甚大な被害を受けた地域の一つで、海沿いにある宮城県石巻市及び牡鹿半島に派遣された。

ライフライン、道路が完全に寸断された現地は発生から一週間が過ぎていたが、まだ冬の真っ只中でとても寒かったことを覚えている。石巻市内は車、家屋、店舗等何もかもが跡形も無く押し流され、震災以前の町の姿は想像もつかない。壊滅した町でコンクリート製の頑丈な建物だけがかりうじて残っていた。道路の両端に瓦礫が山積され、道路はデコボコ、車が通る度に打ち上げられてきた砂がまき上がり視界が奪われる状況で、車で移動するのもやっとのことだった。道の周囲には着の身着のままの格好の人々が、家の後片付け、食糧、水の配給待ち、近所の家々の安否確認のために行き来していた。見かけた人々は、これほどの被害を受けながらも決して絶望的な表情をせず、むしろ前向きに普段どおりの顔をされていたように見えたのが印象的だった。

私たちに課せられた任務は行方不明者の捜索。どこで何人が行方不明になっているか見当も付かない。海岸沿いの現場では打ち上げられた瓦礫の中に人の手らしきものは見えないか、倒壊した家屋では中に人が埋まっていないか、とにかく見える範囲には全て目を向け、目に付いたものは全て手に取り、「ここには誰もいない」と納得がいくまで探すよう心がけ、隊員にもそう指示



した。しかし、瓦礫の山は想像以上に膨大で、人間の力ではとても太刀打ちできない物も多いうえ、地表まで見渡せる場所も少なく、捜索は難航し、時間だけが過ぎていった。自然の前では人間の力など微々たるものだと痛感させられた。使命感に燃えていた自分が小さくも思えた。ある日の捜索で、一階部分が潰され二階部分だけが残った家屋があった。私は連日の捜索で疲労がたまり、どうすることも出来ない瓦礫を前に、現地入りした時に抱いたかつてないほどの使命感も打ち砕かれそうになっていた。瓦を全て取り除き、天井部分をエンジンカッターでこじ開けて中に入り、ばらばらになった柱、梁、家具を引っ張り出して家の中

を捜した。残念ながら発見には至らず、午前中の作業を終えた。

そして休憩のため駐車場所に帰ろうとした時のことである。家屋のそばに数人の人が立っており、私達が前を通り過ぎようとした際、その人たちは私達に向かって帽子を脱ぎ、手を合わせ、深々と頭を下げてきたのだ。私の目から自然と涙がこぼれた。力になりたいという気持ちとは裏腹に、行方不明者を発見することが出来なかった悔しさ、歯痒さがこみ上げ、そして何よりこの人達はきっと「どうか見つけてほしい」と祈るような気持ちで私達の作業を見ていたのだろうと思うと、涙が止まらなかった。敬礼で応ずることすら出来なかった。私は休憩中その光景を思い出しながら、「自分は最後まで絶対に諦めない」、「納得いくまで捜させてくれ」、「一人でも多くの方を家族のもとへ返す」と何度も自分に言い聞かせた。「そこまでしてくれたんだったら、もういいよ」と言ってもらえるまで。

涙はいつしか『勇気、気力』へと変わった。過去に経験したことのない出来事であった。

どれだけ貢献出来たかは別として、瓦礫の他にも粉塵による健康被害、余震、津波の再来等の恐怖と闘いながら我々は任務を終えた訳だが、忘れてはならないのがこの震災で殉職、行方不明となった警察官が多数いることだ。悪夢のような状況の中、警察官として押し迫る津波を背に避難する住民の最後尾で任務についていたのだろう。まさに命がけだ。その貴い犠牲によってどれだけ多くの命が救われただろうか、その活動に対し心から敬意を表したい。

父、夫、子、残されたご家族の方々には、かくも勇敢に津波に立ち向かった警察官が家族にいたことを誇りに思っていたきたい。

今後、被災地で得た『勇気、気力』を一生の宝とし、後輩達にこの経験を伝承していきたい。そして被災地で活動した経験を『誇り』に思い、偶然にも震災の年に産まれた我が子にも父が警察官であることを『誇り』に思ってもらえるよう今後の警察人生を歩んでいきたい。



原発20km圏内での捜索活動